

## ワンドフル空手第3 1話 TV解説

何時もながら時間が早い。生活のテンポがすべての面でスピード化されている。

だから朝の散歩はことのほか大切である。

頭上を覆い尽くす緑の中を歩く、それとない微風によって初夏の花マグノイアの香りが漂う。いい香りである。

あわただしい時間の合間、花の香りは忘れそうになる情感をよびさましてくれる。

所々に濃い青色の紫陽花が咲いている。

季節に咲く花々は飛ぶように流れる生活の中で、ふっと歩く足を止めさせてくれる。

と云う訳でワンドフル空手第3 1話。

1年が過ぎるころ、日本の総本部から第5回全日本大会の為の召集があった。

ちょうど今後の計画をもう一度館長と相談しなければいけない時期でもあった。

日本に帰れる。費用は本部もち、弾む心を抑えるのに苦勞した。

久しぶりの日本、なにからなにまで素晴らしく感じた。

毎日のように力男や関根 {二人とも先に逝ってしまったが、あの頃は三人とも若く力が溢れる様にあった} と飲んで食べて笑って唄って、時には涙ぐんで過ごした。

極真会館本部道場での稽古は全く出なかった。

ただ全日本大会の打合わせで館長室に呼ばれたときだけ至妙な顔つきをした。

「キミーTV解説をやりなさい」と館長から命じられた。

「エッ！」とTV解説まさか〜と思った。

故茂兄、は主審と演武と言うことになった。

解説など全く経験がないし、それにTVに出演などしたことがない。

ちょっと心配したがカラテの試合の話である。なんとかなると気軽に考えた。

最初のTV解説は確か1 2チャンネルであったように思う。



TV解説 いくら緊張ぎみであった。

記憶はおぼろげであるが、アナウンサーは杉浦と言う人のようだったように思う。  
大会開始前のわずかな時間に簡単な自己紹介と打ち合わせをして放送席に着く。  
あまり動揺はなかったようだったが、いざ放送がスタートし現実に目の前にマイクやカメラを突き付けられると、やはりプレッシャーを感じて仕舞い解説する前に構えて言葉が硬くなるというか、格好つけようと焦ってしまった。  
なぜか宮本武蔵の五輪書“水の巻、兵法心持の事”・・・常の心に替わる事なかれ。  
常にも、兵法の時にも・・・を思いだしたようだった。  
アナウンサーの人が上手く私の話を誘導してくれたので自然体に戻れた。  
その後は試合の流れ、選手の得意技、動きをナチュラルに話すことが出来た。

当時は極真会と伝統派いわゆる寸止めの流派では組手の内容が大きく違っていた。  
先に断っておく、これは私一人の意見である。  
現在でもいわゆる、伝統派とフルコン系の人では構え方も足の運び、多用する技の流れも違うように見えるが、最近では、お互いにある程度の影響がその技や動きに現れているように見える。  
大会出場選手の予備知識は極真本部の後輩の名前ぐらいしか分らなかったが、目の前のマットで向かいあう選手を見てすぐに極真会の選手か、伝統派の選手か見分けがついた。  
伝統派、寸止めの組手を稽古している人は、両足を前屈立ちや騎馬立ちの様に広くとり、前の拳は胸の高さ、奥の拳は水月まえに置くように構える。  
それに足の運びは、両足を弾むように使い、飛び込むようにして正拳を繰り出す。  
全部が全部ではないが殆どの人がこのように構えていた。  
試合ルールがお互いの技の応酬の中で、一発の突きや蹴りを出した刹那に、主審と副審が判定を下し、その瞬間に試合の流れを中断するため、瞬発力を活かした構えと足の運びが必要になるように見えた。  
極真のルールでは相手が倒れるか、ダメージを受けて動きが止まるか、また試合時間が終わるかであり、試合中に主審が試合の流れを止めない。  
止める時は倒れた選手や場外に出た時、また反則があったときぐらいである。

大会がスタートし、2～3の試合のあと気持ちが落ち着きTV解説にも余裕が出た。  
気持ちが落ち着くと選手が構え合う、その構えからどんな技がでるか、試合がどんなふうになるかある程度読めるようになってきた。  
極真会の選手も右足前か左足前で右利きか、左利きか、腰を落として深く構えるか、それとも中腰に構えるか、その選手の構えと足の運びの使い方である程度の予測がつく。  
腰をいくらか落として、構を変えずに送り足で前に出ながら間合を詰めるタイプの選手は接近戦を得意として突きの連打、膝蹴り、下段回し蹴りを多用する。  
このタイプの選手は一般的に言って身体が硬く変化のある蹴り技をあまり使わない。  
中腰か、もしくは少し高く腰を保ち構え、弾むような足の運びを使い変化のある動きを見せる選手は、多彩な蹴り技を使いこなす人が多い。  
身体に柔軟性がある選手は蹴りの角度を変化させる組手を見せる時がある。  
一般的に言って構えた両足が狭いか広いかで突き技を主とした前に出る組手か動き回り蹴りを主とした組手を得意とする選手か、ある程度の予測がついた。  
またその選手の気合も、名前が呼ばれマットにあがり向かい合う、お互いに礼を交わし視線を交差させ、そのあと技が最初に絡み合う、その技の出し方でその選手の気合の度量がある程度読めた。  
気合負けして夢中で突いたのか、それとも自分の組手の型に嵌める様に技を出したのか。

選手の動きを見て、その人の気合がどの程度か感じられた。

選手、試合内容がある程度読めるようになると、解説も面白くなった。

まえにも言ったように、最初はあまり言葉が出てこなかったが、試合が進むうちに、どんどん試合展開の予想を話せるようになった。

それからはアナウンサーの質問を待つだけでなく、試合の流れを予想できた。

「・・・構えが硬いですね、相手の下段の回し蹴りで気がそこに止まってしまい、上段が空きすぎますね、上段回し蹴りが決まると思います」とか、「・・・今の正拳、気合負けしているので鋭さがないですね～、あの選手身長があるのでちょっと軽く飛んで外から膝蹴りを出すと入りますね、狙ってますね、・・・突き合いで腕が下がると顔面がガラ空きになり膝蹴りをもらい易くなりますね・・・アッ決まりました!」・・・こんな感じで解説ができるようになった。

大会中に7試合ぐらい私の予想通りの結果になった。

詰将棋みたいに、あの手この手と読んだ。アナウンサーの杉浦さんが感心していた。

それでも間違えやすいと言うか、親しい後輩が出場すると、試合を解説しなくてはいけないのだが気持ちがある後輩に入り過ぎてしまう事があった。

試合を見ながらアドバイスの話になってしまい、解説を忘れそうになってしまった。

それでも何とか無事解説をこなせた。

大会が終わった後、大阪の他流派の武田先生と言う人が、わざわざ私の席に来て試合の解説が的を得ていてとても良かったと、言葉をかけてくれた。照れた。

2回目の解説を任されたときはけっこう余裕があった。

放映中にアナウンサーに簡単な冗談を言えるようになった。

何回か解説を任されたが何度か盧山に変わったことがあった。

TV放映もいつも同じ局ではなく、いろいろと変わったように記憶している。

第3回世界選手権のときが私の最後のTV解説だった。

日本に着いたとき郷田師範から今回のTV解説は盧山の予定だと聞かされた、

ところがフジテレビの横澤さんと言うプロデューサーが、以前の私の解説の録画を見て「大山師範にお願いしたのですか」と私を指名してきた。

横澤さんは、とても温和で優しい人柄の人で、華やかなTV界の人には見えなかった。

フジテレビの有名なプロデューサーと言う話で、タモリの「笑ってもいいとも・・・」とかなんとかの番組もプロデュースしていたと聞いた。

世界選手権まえに横澤さんが、大会の宣伝を兼ねて、そのタモリの番組に出演してくれませんかと依頼してきた。世界大会の為に来日している我々は、もちろん断る訳はない。

私と兄貴、三浦、それにウイリーの4人で出演させられた。



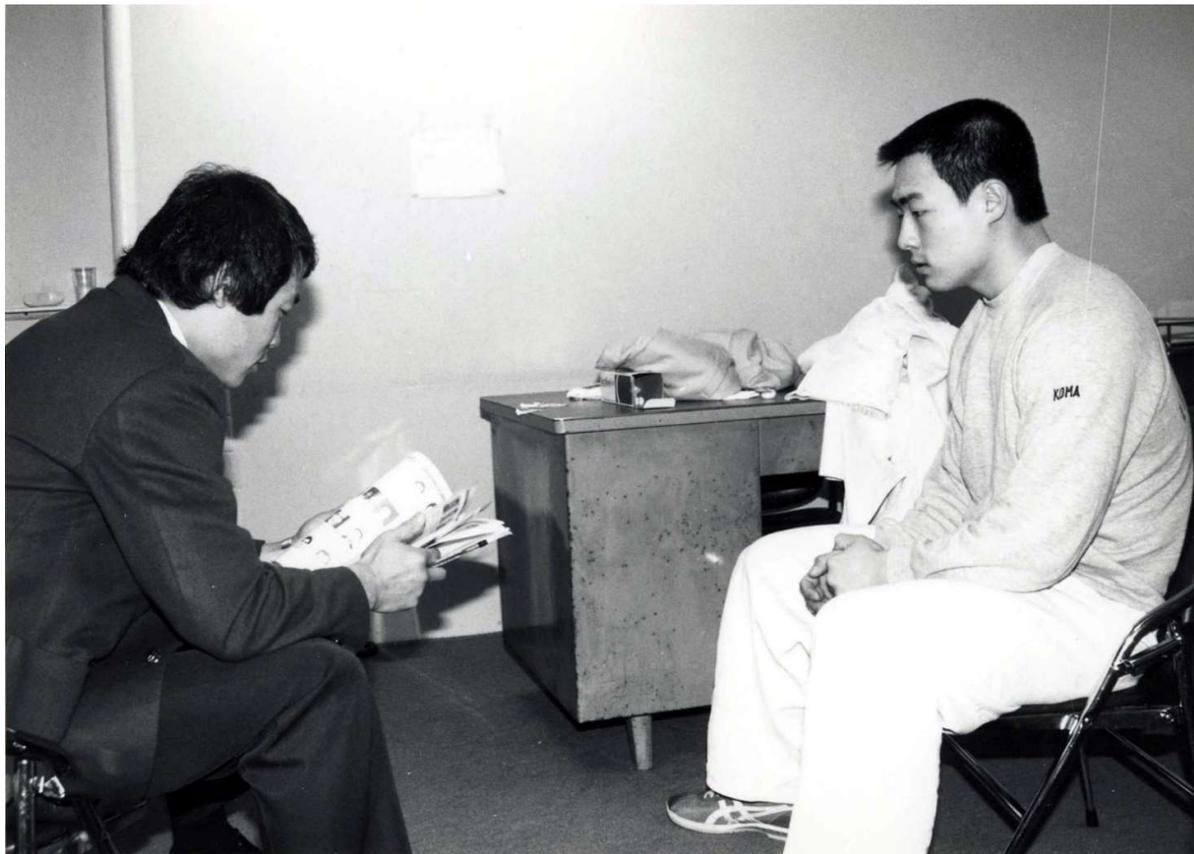
タモリの「笑っていいとも」

最後の解説者は武道館での大会でアナウンサーの古館伊知郎さんと組んだ。古館さん、今までのアナウンサーと、まったく違って試合が始めると凄いエキサイトをして海外の選手をガイジン軍団などと、プロレスの実況みたいな話し方で始まった。驚かされたが、私も負けないようにガンガン喋った様に記憶している。



古館伊知郎氏と熱く語り合う。二人とも若かった。

この第三回世界選手権では、解説にもっと色を添えようと思い試合前に各ブロックの主だった選手のインタビューをした。



若き日の松井館長に試合前のインタビュー

日本の選手は正直に得意技とか試合をどのようにこなすか等けっこう具体的に話をしてくれたが、ヨーロッパの選手は私をスパイのように見ているようだ。

「君たちの得意技などすぐに読めるのに何をそんなに格好付けてるんだ」と思った。

横澤さんも、古館さんも強く印象に残っているが、もう一人関西テレビ放送の出野さんと言うアナウンサーの人が忘れられない。

出野さんは声がとても澄んでいて、解説をする私を上手くリードしてくれた。



出野さんのリードが素晴らしく、ゲストの千葉さんも熱く話っていた。

TVの解説をするようになってから、大相撲のTV解説者、野球の解説者その他スポーツの解説者の話し方に今まで以上に興味をもった。

とくに昔の大相撲の解説者、神風正一氏の解説は素晴らしかった。

神風氏が、実力のある力士の相撲の型、得意技、出だし、気合などを具体的に誰でも分かるように解説をしていた。先にその取り組みの展開も予想していた。

実際に、その相撲が完全ではないが予想したような展開をする場合が多かった。

TVを見ていて相撲の取り組み内容がなんとなく身体で理解できたように感じた。

とっても勉強になった。



今ハリウッドで活躍の真田氏。華やかで美人の志穂美さん。

全日本や世界選手権のとき放送席に芸能界の人をゲストに招待していた。

アナウンサーが気を使って話しかけていたが、私は気軽に声をかけた。

そばで見る芸能人は、やっぱり私と同じ人間だった。

眼が二つ、鼻が一つ、耳も二つ・・・なんか疲れてきたのか、TV の解説の話、おかしくなってきたので、ここで終わりにする。健康第一忘れないように！

オス